

2) 沿岸特定資源調査（セタシジミ）

井戸本純一・西森克浩・山中 治

【目 的】

資源管理計画の策定に必要な資源の現状とその利用状況の実態を把握するため、以下の調査を実施し、現在、集計作業を進めている。なお、来年度も同様の調査を実施し、本年度の結果とあわせて解析を行う予定である。

1. 資源量調査

【方 法】

琵琶湖一円のセタシジミ漁場において、貝曳網漁船によって一定時間の操業を行い、面積あたりの漁獲量と漁獲物の体型を調査した。使用した漁具（貝桁網）は、爪部分の最大幅が144cm、爪のピッチが20mm、爪の直径が9mm、袋網が12節（オープニング約12mm）のポリエチレン製であった。1回につき2分間ないし1分間曳網し、曳網位置および曳網中の平均的な速度をGPS（全地球測位システム）により測定した。漁獲物は、通常の操業方法にしたがい、ふるいによって小型貝を再放流した後のものを対象とした。

【結 果】

①1997年2月に、計27カ所で曳網を試みた結果、18カ所で漁獲が可能であったが、9カ所（おもに南湖）では水草の繁茂によって曳網ができなかった（表1）。

表1 調査した水域の地先（目標物）名と曳網の可否

今西	○	海津	×	沖島東	○	浮御堂	×
長浜	○	貫川	×	沖島西	○	雄琴	×
磯	○	針江	○	沖島南西	○	唐崎	×
松原	○	鴨川	○	牧	○	近江大橋北	×
八坂	○	高島	○	菖蒲	○	東し	×
石寺	○	近江舞子	○	なぎさ公園	○	北山田	×
新海	○	真野	×	烏丸	○		

- ②過去の同様な調査と比較すると、1㎡あたりで漁獲された個数は、17カ所（過去の調査にない沖島南西を除く）の平均で1.64個/㎡で、1989年12月調査の0.62個/㎡および1994年3月調査の1.44個/㎡を上回った。水域別では、湖西、湖南部で増加傾向にあったが、湖北、湖東部では減少傾向にあるところが多かった（図1）。
- ③漁獲個数の内訳をみると、操業頻度の高い漁場（今西、磯など）ではほとんどを殻長20mm未満の比較的小型の貝が占め、全漁獲物では69%が殻長20mm未満であった（図2）。
- ④漁獲重量の内訳では、全漁獲物の47%が殻長20mm以上であった（図3）。

2. 稚貝分布調査

【方法】

水試で開発した調査用小型桁網を用いて一定面積の採集を行い、稚貝の出現状況を含めた資源構造を調査した。桁網は、採取口が幅5cm×深さ3cmのステンレス板製で、袋網はオープニング約2mmのもじ網製である。なお、このもじ網で確実に捕捉されるセタシジミの殻長は、約3.5mm以上である。

【結果】

資源量調査において漁獲個数が比較的多く、体型組成にも特徴が認められた6カ所（今西、松原、針江、沖島西、近江舞子、烏丸）について、1997年3月にそれぞれ5㎡（5cm×100m）の採集を行い（烏丸のみ2.5㎡）、現在、集計作業中である。

3. 操業実態調査

【方法】

漁業者に操業日誌の記録を依頼し、水域別の操業頻度、操業日ごとの漁獲状況等を調査した。

【結果】

依頼した9名の貝曳漁業者（堅田漁協：4名、松原漁協：3名、沖島漁協：1名、中主漁協：1名）から日誌を回収し、現在、集計作業中である。

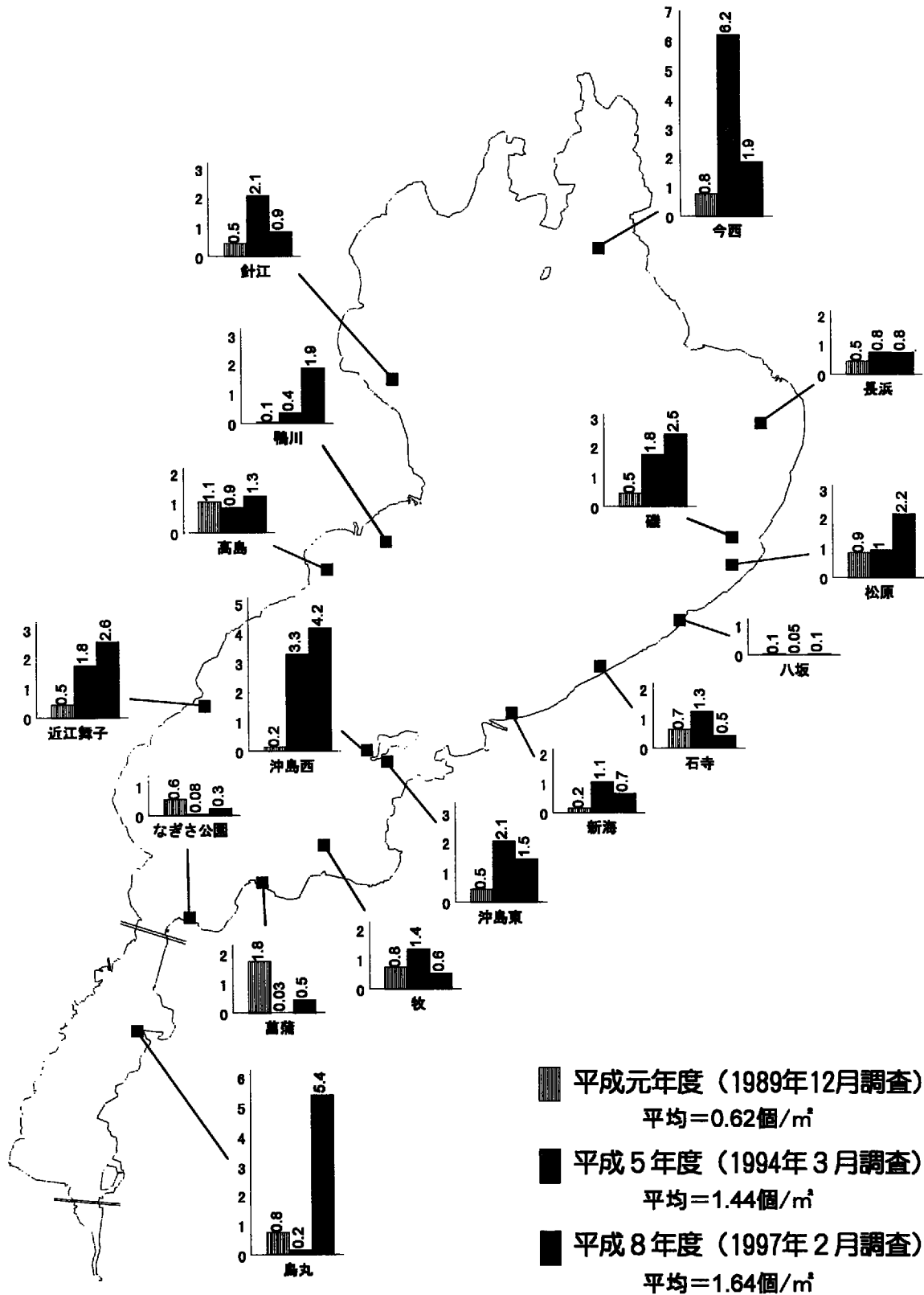
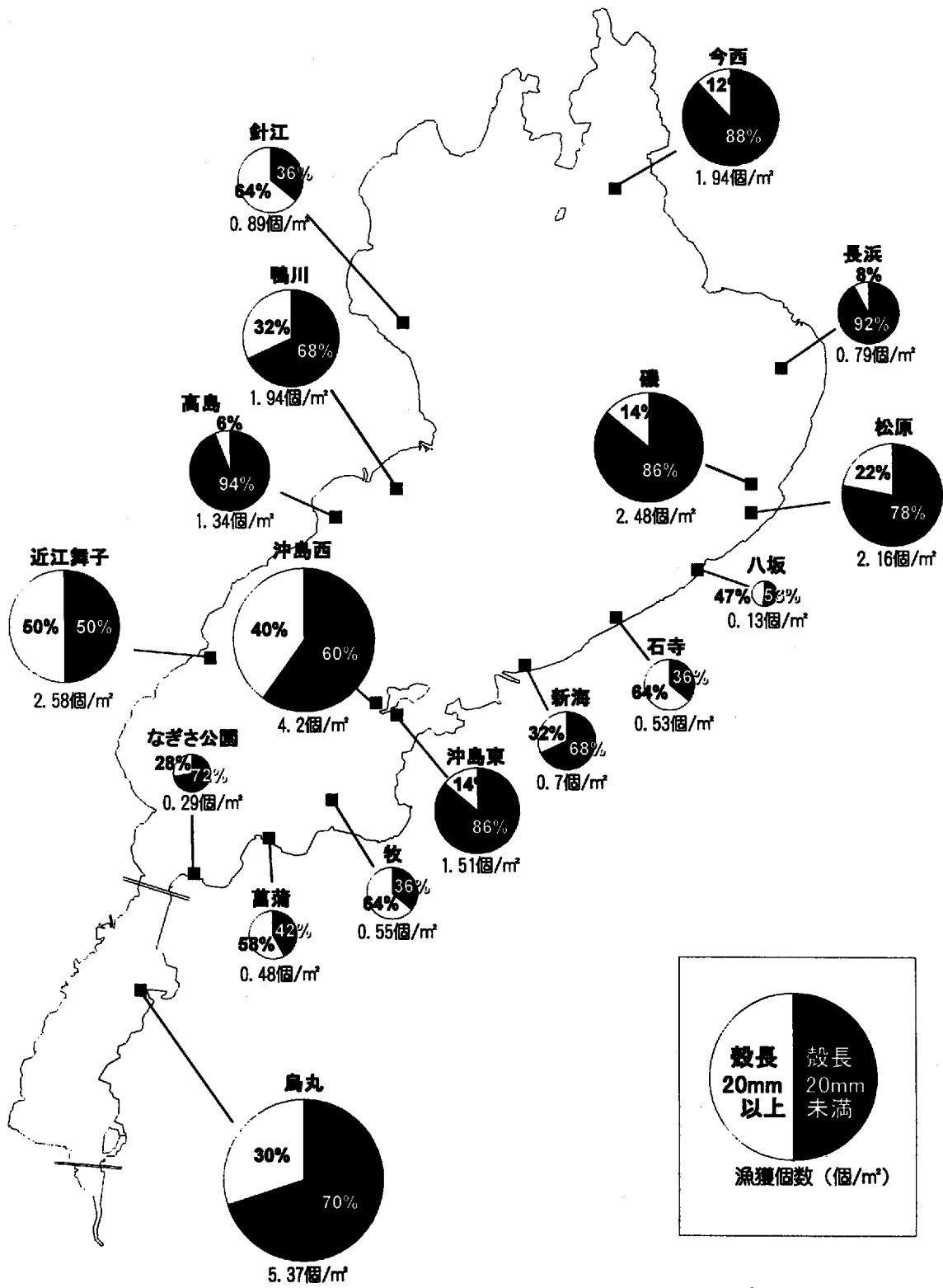
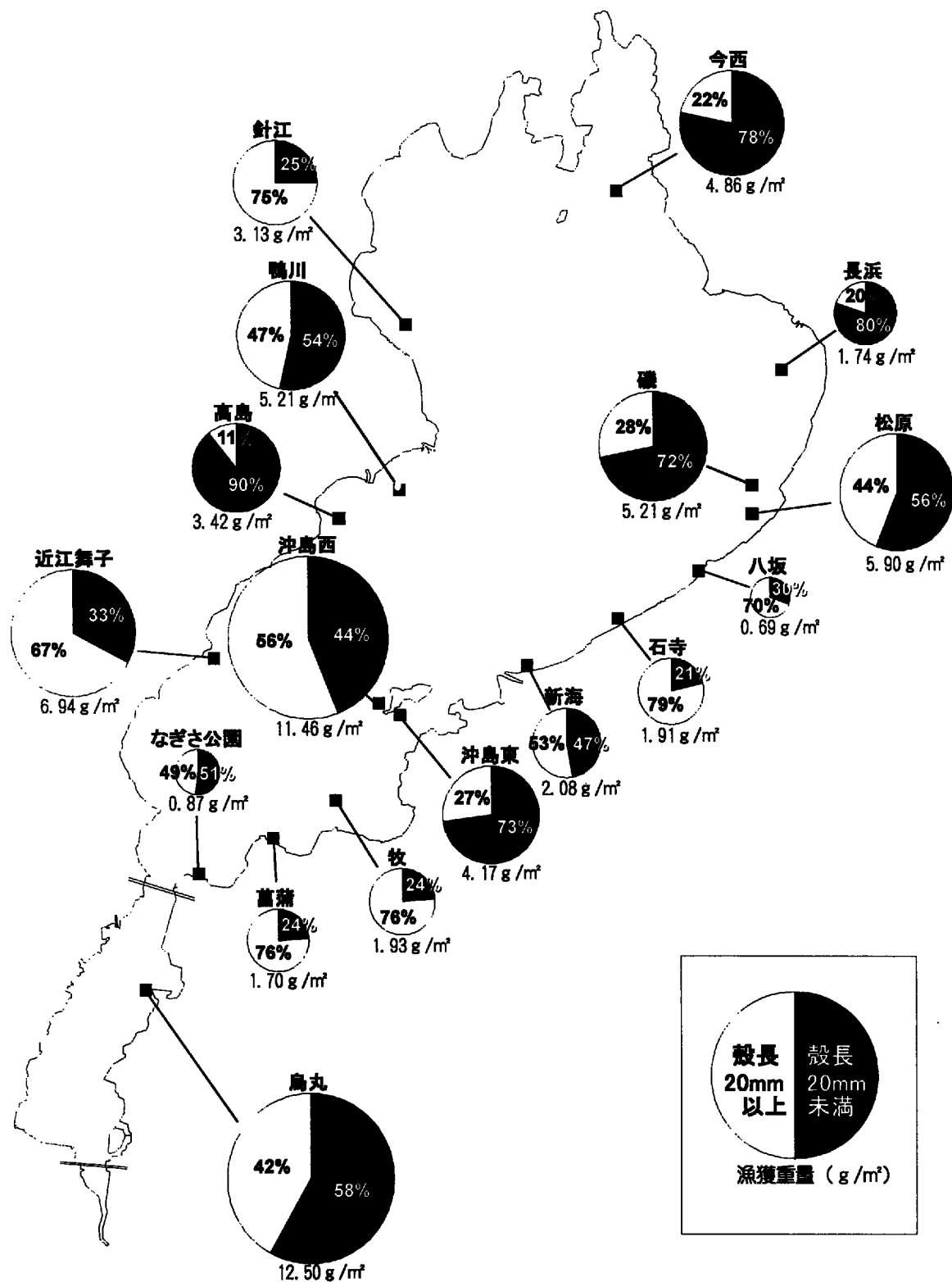


図1 琵琶湖の各地における貝曳網による1m²あたりのセタジミ漁獲個数の変遷.



(1997年2月調査)

図2 琵琶湖の各地における貝曳網による1㎡あたりのセタシジミ漁獲個数と殻長別の内訳。



(1997年2月調査)

図3 琵琶湖の各地における貝曳網による1㎡あたりのセタシジミ漁獲重量と殻長別の内訳。